

| | |
|---------|---|
| 氏名 | 平賀 裕貴 |
| 学位の種類 | 博士(文学) |
| 報告番号 | 甲496号 |
| 学位授与年月日 | 2019年3月31日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則(昭和28年4月1日文部省令第9号) 第4条第1項該当 |
| 学位論文題目 | アンリ・ベルクソンにおける神秘主義 — 〈事実の複数線〉 〈創話機能〉〈機械〉 — |
| 審査委員 | (主査) 澤田 直 (立教大学大学院文学研究科教授) 桑瀬 章二郎 (立教大学大学院文学研究科教授) 杉山 直樹 (学習院大学文学部教授) |

I. 論文の内容の要旨

(1) 論文の構成

序論

第1章： 神秘主義というエニグマ

—第1節 20世紀前半期フランスにおける神秘主義研究の諸相

—第2節 ベルクソンにおける神秘主義との遭遇

第2章： 神秘家と〈事実の複数線〉、そして記憶としての〈生き延び〉

—第1節 哲学的方法としての〈事実の複数線〉

—第2節 記憶としての〈生き延び〉と記憶の伝播

第3章： 〈創話機能〉と神秘家

—第1節 〈創話機能〉あるいは語り之力

—第2節 〈創話機能〉のイメージとシンボル

第4章： 〈機械〉と神秘家

—第1節 「暗夜」にうごめく〈機械〉

—第2節 戦争する〈機械〉と「魂の代補」

結論

Bibliographie

仏文要約

(2) 論文の内容要旨

フランスの哲学者アンリ・ベルクソン (1859-1941) の哲学において神秘主義というトポスが果たした役割を、それが明示的に論じられる『道徳と宗教の二源泉』を中心に読解するとともに、当時の思想状況などとの関係にも着目して、その特徴を浮かび上がらせることで、宗教の枠組みを超えた神秘主義の意義を解明しようとする研究である。

序論において問題構成が説明された後、第1章「神秘主義というエニグマ」では、第1節において、20世紀前半、フランス哲学界において神秘主義への関心を強く示した哲学者たちを取り上げて概観、心理学、哲学、神学、文化人類学といった学問領域をまたいだ数々の神秘主義研究が行われていた状況を提示。続く第2節では、ベルクソン自身が同時代の神秘主義研究者と並行しながらも、独自の解釈を進め、次第に神秘主義に接近していた経緯を、講義録や講演などの資料を参照することで明らかにする。第2章「神秘家と〈事実の複数線〉、そして記憶としての〈生き延び〉」では、〈事実の複数線〉という論じられることの少ない概念を神秘経験との関連で読み解くことによって、その内容と射程が検討される。〈事実の複数線〉によって、神秘家の経験は「蓋然性」の蓄積の結果「確実性」への道が開かれること、哲学の諸問題への回答が神秘経験から引き出されることが確認される。第3章「〈創話機能〉と神秘家」では、神秘家と関係づけられることの稀な〈創話機能〉を、

神秘家の経験の伝播と関連させて分析し、神秘経験の伝播における〈創話機能〉の重要性が強調される。動的宗教は創話機能が付与するイメージとシンボルによってでなければ拡散しない点に着目し、イメージとシンボルが果たす役割が分析される。第4章「〈機械〉と神秘家」では、キリスト教神秘主義における重要な合一経験「暗夜」の只中に、ベルクソンが〈機械〉の姿を見てとるという一見不可解な態度に着目し、『道徳と宗教の二源泉』最終章で論じられる神秘主義と〈機械〉との錯綜した関係が考察される。通常、神秘主義と機械は対立するものと見なされるが、『創造的進化』における、「機械」という用語の使用法などを検討しつつ、単純な対立ではなく、相補的な関係にあることが指摘される。

以上、4章8節の考察を通して、これまで主題的な検討が十分に行われてきたとは言い難いベルクソンにおける神秘主義というトポスがもつ今日的意義が明らかにされるとともに、彼の思想におけるその位置づけについても多くの示唆が提示される。

II. 論文審査の結果の要旨

(1) 論文の特徴

本論文は、これまでアンリ・ベルクソン研究において、主題的に扱われることの少なかった〈神秘主義〉の重要性に着目し、その役割がベルクソンの後期哲学において果たす役割を積極的に評価した上で、神秘主義の機能と射程を多角的に検討するものである。

まずは、『道徳と宗教の二源泉』とそこに表明される神秘主義を同時代の文脈のなかに確実に位置づけた上で、ベルクソン独自のいくつかの概念を補助線として、その特徴を浮かびあがらせようと試みている。とりわけ、ジェイムズ、ドラクロワ、バリュジ、ブロンデル、マリタン、レヴィ＝ブリュルらの神秘主義観との対照は有益なものである。これらの思想家についての研究そのものはあっても、それを思想史的な文脈においた上でベルクソンと比較する試みはほとんどなされてこなかった。

また、通常は「静的宗教」との関係でのみ扱われ、神秘主義とはほとんど結びつけられないことのない「創話機能」を積極的な要素として解釈したことも重要である。「創話機能」をジャンネの精神病理学理論と接続する試みは以前から存在するが、表面的な語彙の共通性の指摘などに留まっていた。本論文は、未邦訳の文献との突き合わせの作業も含め、これまでの研究の欠落をかなり埋めるものとなっている。

さらに、これまで謎とされてきたベルクソンの神秘主義における「機械」ないしは「機械論的なもの」がもつ両義的な位置を、従来の単純な二項対立とは異なる観点から解きほぐし、分析した点にも大きな特徴がある。機械というタームは、反生命的な語彙に属し、ベルクソン哲学においては専ら否定的に用いられているとするのがこれまでの解釈であり、『二源泉』における、「機械」という語の積極的な使用法は、研究者にとっては謎であった。第一次世界大戦前後までの機械論と、『二源泉』の立場の間に見られる断絶を文献および精緻な読解から指摘し、その上で、ベルクソン晩年の思想における独特の論理（運動や機能の単純さと、それを支える機構の無限の複雑さととの矛盾なき表裏一体性）に着目して、新たな読解を試みている点は斬新である。

(2) 論文の評価

平賀裕貴氏の論文は、『道徳と宗教の二源泉』という評価の分かれるベルクソンの最後の主著をどのように位置づけるかという、これまでも研究が重ねられてきた問題に、神秘主義の積極的な評価という新たな立場から取り組んだものである。〈事実の複数線〉〈創話機能〉〈機械〉というトピックスは、先行研究でも取り上げられてきたが、それらを神秘主義理解と結びつけつつ、正面から論じた試みはなく、この視座は評価すべき着眼点と言える。全体としてきわめて豊かな示唆を与える読解の試みであり、斬新なアイデアも散見された。哲学と宗教の関係がいまなおアクチュアルな問題であることは忘れられがちであるが、本論文では地道な実証的調査と、丁寧な文献読解を通して、ベルクソン哲学における

宗教的なものと科学的なものとの関係が精緻に検討されており、この問題に関して新たな地平が提示されている点は高く評価できよう。その一方で、個々の分析の細部に関しては展開不足な部分もあり、今後さらなる深化の必要があることが審査委員から指摘された。とはいえ、ベルクソン哲学における神秘主義の問題に対して明確なヴィジョンを与えたことは明らかであり、今後の発展が期待できる論文である点で審査委員の意見は一致した。